

論文

ソローの自然詩 ——非人間的存在をめぐる二分論の超越へ

藤 田 佳 子

ソローの詩の評価はいまだに低い。最近のソロー学会誌 *Concord Saunterer* (2018)においても Michael R. Schrimper が本国学界での冷淡な扱いに触れている (Schrimper 55-56)。ソロー詩研究の書物もまだ無い。エマソンの詩論を全面的に受け入れながらも「ソローは大胆さに欠けた」(Ford 1)。韻律のために月並みな表現に陥っているところが少なくない。しかしソローにとって幸いにも、早い時期に彼は自分の詩才を発揮する場が散文の方であることを見抜き、重点を移し、結局 *Walden* において後世に残る詩的散文 (prose poem) を創出したのである。従って、詩の主要創作時期は 1837 年から 1845 年、生前に活字化された詩は *A Week* に組み込まれたものを含めて 85 編であった (Witherell 49)。では詩作品を考察する場合いかなる道があるのか。Elizabeth Hall Witherell の考えによれば、ある特定の概念に絞って考察する、或いは、最終的にソロー文学全体の理解に資することを目標に考察する、の 2 点になる (Witherell 2 49 et al.)。いずれも価値判断を回避した道であるが、前者には、最近の “enmeshedness” の概念でソロー詩を読むシュリムパーの好論文¹があり、本稿は後者の立場をとる。ソロー詩の一特徴が散文作品ではいかに現われているかを手掛かりにしたい。

1 同化の願望

当時の背景を見ると、とくに超越論詩では「道徳的であること」(Buell 1 97) が求められた。エマソンの “Each and All” はその典雅な一例であり、森や海岸を舞台に自然界での経験、詩人の反応、最終的に獲得した真理、と典型的

な三段階で展開している。しかしそれとは全く異なって、ソローの自然は教えることを期待されてはいない。ソロー最大の願望は自然との同化²あるいはその一部になることである。例えばソロー22, 3歳の作、“The Breeze’s Invitation”では、柔らかな西風の吹く野原に来たソローはこう歌いかける。

What if I no wings do wear,
Thro’ this solid seeming air
I can skim like any swallow
Who so dareth let her follow,
And we’ll be a jovial pair. (lines. 6-10)

そして西風とともに二匹の羽虫となって日が落ちるまで大空で音楽を奏でようと続く。更に、終わり近い第5連では“I the king and you the queen”と気持ちが高まっていく。二人の奏でる音楽に「大地も耳を傾ける」。何という若々しい想像力だろう。読者へのメッセージなどは無くただソローの願望があふれ出た一作である。自然との同化願望はのちの散文作品でも表現を変えて、しかし存在し続ける。同じく西風との同化を願う詩にシェリーの名唱“Ode to the West Wind”がある。しかしこの詩の同化の基点はあくまで人間の側にある。“Be thou me”と。西風の強さも速さも詩人の意識を通して描かれる。一方ソローは易々と人間の立場を捨てる。否、元々人間を非人間的存在と峻別する壁はソローにはきわめて脆弱なものであった。

非人間的存在との同化の憧れは、本来、合理主義に立つ近・現代欧米人には理解・共感し難いものなのだろうか。Branka Arsićは、それは単なる思い付きやオカルト的なものではないと前置きしてベンヤミンの“flâneur”（遊歩者）の概念に言及して説明する労をとっている（Arsić 318-32）。現代人フラヌールは、ちょうど森に行くソローのように何ら特定の目的をもたず過去も未来も忘れて只無心に歩く。すると空白になった彼の心にパリの街路（ソローの場合には森）が入り込み彼を支配していくのだ、と現象学的説明が紹介される。更にアーシッチ自身の言葉が付加される、「フラヌールとは、木や馬や鳥のオーラに心奪われ自らそれになっていく（“becoming them”）者である」（Arsić 321）。

ソローにとってオーラを放つ存在とは、活力（vitality³）に満ちた無生物で

ある場合が多い。*Walden* では土手の斜面を流れ落ちる雪解けの土の動きに心奪われ、観察し続け、その背後に大いなる生命を感知するに至る。同種の場面はすでに詩“The Thaw”に現れている。雪解けを見たソローの反応はこうである。

Fain would I stretch me by the highway side,
To thaw and trickle with the melting snow,
That mingled soul and body with the tide,
I too may through the pores of nature flow. (lines 3-6)

現象の背後に大いなる生命を感知する余裕はこのソローには無い。目の前の現象に意識は集中し、只即物的に「溶けて一緒に流りたい」のである。この願望の実態を Arthur L. Ford は、エマソンと対比しつつ明快に述べる。「エマソンは自然を理想に到達する為の媒介とし、一方、感覚重視のソローは……自然への強い親近感ゆえに魂のために体を放棄することはなし得なかった。究極的に求める体験とは、文字通り木々や、鳥のさえずり、川の流れ、池の中に取り込まれることなのである」(Ford 4)。このソローは“The Summer Rain”でも雨自体と化すことは叶わずとも、携えてきた本を打ち捨て、待ち受けていた俄か雨の中に飛び出していく。「巻き毛から水を滴らせコートに雨滴をつけて楽しげに行く妖精」と化したソローから彼の実感した同化の幸福感が伝わる。詩においてはまず即物的に願望が表されていることに注意しなければならない。従ってソローの同化のありようを示す“melt,” “thaw,” “dissolve”は重要な語である。

“The Thaw”に戻るとソローの願望はもちろん実現不可能である——「でもああ、私は音を立てることもしぶきを上げることもできない」。その時、音が頼みとされる。「だから私の沈黙 (“silence”) でこの場の音楽に調和しよう」。この“silence”は無言になって懸命に聴き取る行為を意味し、別の詩の中の“and I sole ear”にあたる。詩はここで終わるが、雪解けの（生身の聴覚では聴き取れない）音を介した別次元の合一、つまり音が想像力と直感に働きかけ、内面的に同化を体験させる可能性が暗示されている。同化と音について更に考察する前に、音がソロー詩を時空を超えて深化拡大する機能をもっている点を確認しておきたい。例えば “They who prepare my evening meal below” で始

まる無題詩では、階下から聞こえる夕飯支度の何気ない音が牛の首につけた鈴という自然界の音を呼び込み、カバの木が風に揺れる音につながり、そこから更にその野で過ごした至福の夏が思い出される。哀惜の念を込めてソローがその遠い日々を思い出す時、ソローの今の心境も想像されて詩は音に導かれて重層性を帯びる。

さて“*The Thaw*”では音を介した合一が求められることになったが、この試みが素晴らしい世界へ導く場合がある。“*When breathless noon ...*”で始まる無題詩において、静寂の真昼、森からツグミの歌が聞こえてくる。ソローは全心を集中して聴く。

Fondly to nestle me in that sweet melody,
And own a kindred soul, speaking to me
From out the depths of universal being, (lines 9-11)

と、自然の音楽を介して鳥の魂との同化が暗示される。そして訪れたものはエピファニー（詩人の場合にはインスピレーション）到来の瞬間である。言語化不能の体験についてはソローは詳述を避け只こう書く。

No longer time or place, nor faintest trace
Of earth, the landscape's shimmer is my only space,
Sole remnant of a world. (lines 15-17)

ソローに代わってウィザレルがソローの詩“*Inspiration*”を参照しながらこう側面から説明する。「その経験は突然で不可抗的なものであり、詩人の五感の限界を拡大する。詩人の魂を.....時間の支配から解放する。それは再生であり覚醒である」(Witherell 164)。

しかしエピファニーはいつかは終わる。そのとき再来した現世はソローにどう映るのだろうか。＜陶醉と覚醒＞はロマン詩主要テーマの一つであり、まずキーツの“*Ode to a Nightingale*”を見てみよう。夜、暗い森からナイチンゲールの歌が聞こえてくる。詩人は憂き世を離れ「詩の翼」に乗って鳥の許に飛んでいき共に暗い森に沈み込みたいと願う。それは甘美な死の到来でもある。し

かし気づけば鳥の歌は遠ざかりつつあった。「夢か現^{うつ}か」で収められるこの詩において、キーツが死の誘惑から解き放たれて元の世界と共存しうる確証は留保されたままである。一方、ソローにおいてもツグミの歌はやがて終わる。その時立ち尽くしたままのソローの耳に今度は風に乗って聞きなれた牛や豚の声が届く。だがそれは厭わしいものではない。ソローは変化に一瞬戸惑いながらも「私はこの世の住人として再び歩き始める」と詩は結ばれる。この健全な現実感覚がソローと英ロマン派とを隔てる一つの特徴である。彼にとって現実界とは思想や制度ではなく見慣れた人々や愛しい自然でできている。何気ない事物がどれほど大切であったかを“**Within the circuit of this plodding life**”で始まる無題詩が明示している。ソローの高い精神性はいうまでもないが一方、特に詩においては身体性と現実感覚は大きな特徴であった。

2. 二分化の解消へ

非人間的存在との同化というソローの願望は、人間中心の二元論が厳存する西洋文化では全く異質のものであった。従って今日で見れば、ソローのこの願望にはそれと表裏一体をなして、二分化を無効にする動きが働いている。詩作においてはまず、生物・無生物の〈人間側への引き寄せ〉である。ネイチャー・ライティングの歴史では今も Edward Topsell が言及されるが、同種の感覚がソローにも現われている。1838年1月21日の日記に記された詩“**The Bluebirds**”では遠方の崖から飛来した鳥のさえずりがここでも詩人の内部に「不思議な記憶」、「遠くの光景」を再現する。自然界からの刺激で詩人の内面に重点が移るのは超越論詩の常だが、最後の一行が効いている。「{鳥は} 私に歌ってくれる目的でやってきたのだ (“**On purpose to sing to me**”)」。この設定をしてくれた鳥は特定の個人に対する心と意思を持ち合わせることになる。鳥の内面への言及は例えばエマソンの“**Titmouse**”にも見られるが、ここでは背後に擬人化のレトリックが存在している。ソローの鳥は動物であり続けながら人間の心を持っている。更に、ソローも投稿した *The Dial* には天体の詩が多いが、通常、運行の外面的描写に終わっている一方で、ソローはこう書かざるを得ない。「星は私を思い出して (“**remembering me**”) 戻ってくるのだ」(*J* 24 Aug. 1841)。擬人化とは全く無縁にソローは無生物に知覚動詞すら使うのである。非人間的存在を人間に近づける感覚は散文作品でも持ち続けられていて、

Michelle C. Neely は *Walden*、「より高き法則」の章において単語面から差別化の解消を図る手法に注目している (Neely 126-35)。“murder,” “tenure”など人間用の語をあえて小動物に使用する高度な技法である。だが詩においてはソローの心情はより直接的に表わされている。

現在、ソローはネイチャー・ライティングの始祖、エコロジー文学の旗手とされているが、初期日記や詩群を見ると改めて、その原点は周囲の生物、無生物に人間性を見出す資質にあったと思われる。これがアニミズムとどう違うかと問われれば、ソローの場合は宗教や思想ではなく、ソローの真摯な観察の結果生まれた信念であると言わなければならない。二分化を無効にするもう一つの動きは、ソロー側から抱く肉親感情や共感の表明である。小動物の立てるかすかな音に兄弟愛の湧き上がるのを感じる、と述べるところは少なくないが、ここではもう一方の共感の方をとりあげる。例えば、夜の散歩でソローは犬の遠吠えを聞くことがある。“I too like thee, walk alone in this strange, familiar night,...and barking I hear only my own voice.” (*J* 24 June 1840) ソローは自身の内奥の声を聴く。この共感によって遠吠えの犬はすでにソローの分身と化している。

3. 物質へ

このようにソローは非人間的存在を人間側に引き寄せていくのだがその対象が姿かたちをもたぬ気体にまで拡大されるのが、“Fog,” “Haze,” “Smoke”の 3作である。相次いで 1843 年に書かれ、ソロー詩の中では最高の部類に属し独創的なイメージ群が躍動している。なぜこの時期に集中したのかは Laura Dassow Walls の伝記を見ても内的手掛かりはない。ただ、『日記』を見ると、1839 年の初年から継続して日記文あるいは詩の習作の形で大気中の現象に関心が示され、更に風に関してはその天上性よりも活力に惹かれていることも確認できる。

同化という概念で本稿を進めてきたが、上記 3 作では各詩の第 1 行が示すようにその段階はすでに通過している。本稿第 1 セクション「フラヌール」の箇所を援用すれば、ソローの心は眼の前のオーラを放つ物質にすでに支配されている。そして今訪れているものは「静かなインスピレーション……自我のヴェールがすでに引き上げられた」(強調原文、Schrimper 65) 状態である。そこで

出現するものは数年前のような驚くべき別世界ではなく、対象にさらに深く沈潜しその本質を捕捉したいという衝動である。この状態でソローは書く。3作に共通する特徴は比喩言語の連続であり、例えば“Haze”は次のように始まる。“Woof of the sun, ethereal gauze,/Woven of Nature’s richest stuffs,/Visible heat, air-water, and dry-sea.” (lines 1-3) 対象に没入して無心に描くとき、観念的な語や側面からの説明語は入りようがない。“Haze”では11行に亘る比喩表現によって靄の熱と光、質感が感覚的に伝わり、とくに3行目の撞着語法が靄の捉えがたさを表して効果的である。最後の“Smoke”は全文を揚げる。

Light-winged smoke, Icarian bird,
Melting thy pinions in thy upward flight,
Lark without song, and messenger of dawn,
Circling above the hamlets as thy nest;
Or else, departing dream, and shadowy form
Of midnight vision, gathering up thy skirts;
By night star-veiling, and by day
Darkening the light and blotting out the sun
Go thou my incense upward from this hearth,
And ask the Gods to pardon this clear flame.

この詩の眼目は、人間と物質の意思疎通さえ成り立っていることである。開始と同時に煙はすでに鳥と化している。「歌わぬ」とあるように煙の身にまとう異様な静けさを残したまま一直線に上昇を続ける姿には、変容し続ける靄や霧以上の活力と意思が認められる。煙は「夢」、「ヴィジョン」となって人間の領域に進み、「スカートをたくし上げて」昇る女性の姿が重なって人間化が完成する。ソローの心中で人間の領域に入った煙は今や人間の声を聴きとり、理解するようにすら思われる。思わず最後の呼びかけが発せられる。最後の呼びかけでは、煙の発生源は人間側でありその意味で煙は下位区分に属するのだが、同時に、この呼びかけ自体は煙の活力と精神性が作動主となって引き出したという絡み合った状況が出現している。この物質と人間の融合状態にシュリムパーは“enmeshedness”の語を当てる (Schrimper 62-68)。この語はニューマテリア

リストの用いる概念で、**Rochelle Johnson** が構成因子の相互作用の点から説明しているが (**Johnson, 10-11**)、要するに、物質を本体とする人間を含むすべての存在物が分かちがたく密着・共存している状態を指す。しかし本稿ではソロー詩に新思想を見出すよりも、同化の願望を軸に結果的に人間と非人間的存在の二分化を限りなく無効化していったソローの内面の動きに重点を置いてきた。ソローは結局物質に精神を感知するまでに至ったのだ。

二分化とマテリアリズムの関係では⁴、19世紀、神学の呪縛から解放された新しい科学者たちが人間の精神活動も身体に起因することを実証し、人間の物質性を主張するに及んで、伝統的な精神/身体、人間/動物、自然/文化といった二項対立が揺らぎ始めた。更に、20世紀末に現れたニューマテリアリズムが生命体/物質の区分も越えようとしている。二項対立の解消という点でソローとマテリアリストは同方向の動きを示している。しかし重要な違いは、マテリアリストがそれを認めない一方で、ソローは物質に精神を賦与している点である。これは忍耐強い実験の結果ではなくて想像力と感性を躍動させる詩人の仕事であった。

ところでウィザレルによれば「ソローの詩の四分の三以上は第一人称で書かれるかあるいは語り手を前面に出している」(**Witherell 1 57**)。これはロマン詩通常の様態である。しかしすぐ続けて「{ソローの場合には}にもかかわらず彼らは個性を欠きあまり興味をひかない」(**Ibid.**)と述べられる。語り手のいわば形骸化はソローの人生詩よりも自然詩に多く見られるようである。詩の語りに関して再びシェリーの“Ode”を見ると、第1行目から頻出する“Thou”を使った呼びかけによって語り手の視線は作中偏在している。更に終末に近づくと西風に繰り返されていた“wild”と“**One too like thee: tameless, and swift, and proud**” (1.56)の形容詞群が呼応しあい、西風に仮託したシェリーの自己像というテーマが明確になってくる。一方、ソローの“The Breeze’s Invitation”では野原に行こうと誘っているのだから語り手は事実、存在するが、彼は同化願望の発生源として以上の個性を与えられず、この詩の魅力は別のところにある。

このような傾向をソロー自然詩の語り手はもっているのだが更に、物質を謳った3作になると人間は遂に姿を消し物質が主役の座を占める。“Smoke”に即して見ていくと、煙は「.....のように見える」といった語り手の視線や言葉を

必要とせず、自力で登場し変貌していく。そこには活力とともに意思すら感じられる。その姿に魅せられた作者はただ無心にその動きを写し取るだけであり、人間の意識は作中存在しない。最後の呼びかけは、人間の登場ではなくソローの心中で煙が知覚と判断力を獲得したことの証である。このように、ソローの内部で二分化の超越が進み、人間と物質が弁別しがたく混じりあった(enmeshed)とき、詩のスタイルも変わったのである。

4. 他のジャンル

最後にソロー詩の考察から他のジャンルに関して何が分かるかを、〈同化〉の概念を手掛かりに見ていきたい。*Walden* においても自然への愛と自然から得る喜びは主要要素の一つである。が、同化に近い表現としては唯一この箇所である。“Shall I not have intelligence with the earth? Am I not partly leaves and vegetable mould myself?” (93) 感覚的融合のプロセスは姿を消し、「私は……ではないか」という結果を問う文言に変わっている。同じく「孤独」の章からこれも有名な個所だが、初めて孤独感にとらわれたペルソナに自然との一体感が突然訪れる。だがここで用いられる語は、「合一」とは距離のある「交流」(“society”)であり、「親しみ深さ」(“friendliness”)である。この語の使用には、人間と自然との間の常識的な区分が前提として感じられる。ではそもそもこのペルソナはどのように人物設定されているのだろうか。第1章で明確に造形されている通り、人間精神の再生あるいは覚醒を希求する真正の超越論者であり、そのための実践に赴こうとする人物である。自らに課したものは強い意志に支えられた慎重な(“deliberate”)生き方である。このペルソナは自然の中で我を忘れる若者であってはならない。例えば、ソロー作品に珍しくない鶏は夫々どのような反応を引き出しているだろうか。詩“Cock-crowing”の語り手は鶏の声に夜明けを予知し、殆ど衝動的に丘の頂に向かって駆け出している。身をもって神聖な夜明けを迎え入れるためである。一方、*Walden* でも普通の農家の鶏も登場している。しかし作中圧倒的な存在感をもつものは第2章、止まり木で昂然と歌う朝の雄鶏である。これは人間の目覚めそのものの姿であり、超越論的理想の象徴と化している⁵。

このペルソナと詩の語り手との違いは年齢差にもよるかもしれない。だが、ソローは1850年、*Walden* 改稿中の日記にもこう記している。「マスクラット

が一匹氷の割れ目から出てきた……。彼を見つめながら、相手は私のことをどう思っているのだろうと考え続ける。彼は人間だ、種類が違うだけだ」(J 25 Nov. 1850)。詩に見られたような、人間と動物の二分化を無効にするような感覚をソローはまだ持ち合わせている。ここで、作品のペルソナはソローの実写ではなく意識的に作られた可能性を改めて考えなければならない。アメリカでは伝統的に、作品構成よりも人物に読者の関心は寄せられた。そしてソローも「*Walden* その他の散文作品では一般読者の要求を満たす必要があり、ある明確な語りの声を提供しなければならなかった」(Golemba 84-85)。更にその声がしばしば倫理性を帯びる事情については、「立派な芸術は立派な人間によって創られる」(Buell 2 66) という批評界の通念があり、「超越論者を英ロマン派やホーソン、ポオら同国人とも分かつものは……彼らがこの要請に真剣に取り組んだという事実である」(Ibid. 67)。ここには創作時の自意識の問題も浮かび上がってくる。結局ソローのペルソナは当時の超越論者像をより鮮明にする形で造形されたことだろう。このように、詩の精読から結果的に改めて確認できる第一点は、ソローの散文作品は自伝ではなくあくまで創作であったという事実である。その他、ソローがのちに示す自然の暗いヴィジョンが詩の中にすでにその萌芽を見せているなど、評価は別として、詩の精読から得るものは多い。最後に付記しておく、ソローは終生、詩を放棄し去ることはなかった。

註

1. Michael R. Schrimper, “Thoreau’s Poetry and the New Materialism.”
2. 「同化」 = 「本来異なるものが同じになること、同じ性質に変わること」
(『広辞苑』第7版 強調傍点は本稿執筆者による)
3. Rochelle Johnson は “spirit’ as a vital force” と定義して一貫して “spirit” の語を用いている。““This Enchantment is No illusion”, 5 et all.
4. この個所の記述に関しては次の論文から教示を受けた。Chiyo Yoshii. “Humanity as Matter: Nathaniel Hawthorne’s Vivacious Materialism in ‘The Birth-mark’ and ‘Rappaccini’s Daughter’.”
5. ここで付記しておく、Matthiessen が指摘しているように、“Smoke”はのちに *Walden* に組み込まれたとき、コンテクストの支配を受けて象徴的読みの可能性も生じている (Matthiessen, 166)。

引用・参考文献

- Arsić, Branka. *Bird Relics: Grief and Vitalism in Thoreau*. Harvard UP, 2016.
- Buell, Lawrence. (1) "The American Transcendental Poets." *The Columbia History of American Poetry*. Edited by Jay Parini and Brett C. Millier. Columbia UP, 1993, pp.97-120.
- . (2) *Literary Transcendentalism: Style and Vision in the American Renaissance*. Cornell UP, 1973.
- The Dial: A Magazine for Literature, Philosophy, and Religion, 1840-1844*. Weeks, Jordan, et al. 4 vols.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson: Vol IX: Poems*. Edited by Albert J. von Frank and Thomas Wortham. Harvard UP, 2011.
- Ford, Arthur L. "The Poetry of Henry David Thoreau." *ESQ: A Journal of the American Renaissance*. Vol.61, 1970, pp.1-26.
- Golemba, Henry. *Thoreau's Wild Rhetoric*. New York UP, 1990.
- Johnson, Rochelle. "'This Enchantment is no Delusion': Henry David Thoreau, the New Materialism, and Ineffable Materiality." *ISLE*, Vol. 21, Issue3, Summer 2014. <https://academicoup.com/isle/article/213/606/766701>. Accessed 10 Dec. 2020. pp.1-47.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. Oxford UP, 1941, 1964.
- Neely, Michelle C. "Reading Thoreau's Animals." *Concord Saunterer*, 22 (2014), pp.126-35.
- Schrimper, Michael R. "Thoreau's Poetry and the New Materialism: A Matter of 'Enmeshedness.'" *Concord Saunterer*, 26 (2018), pp.55-78.
- Thoreau, Henry David. *Collected Essays and Poems*. Edited by Elizabeth Hall Witherell. The Library of America, 2001.
- . *The Journals of Henry David Thoreau: In Fourteen Volumes Bounded as Two*. Edited by Bradford Torrey and Francis H. Allen. Dover, 1962.
- . *Walden and Resistance to Civil Government*. Edited by William Rossi.

- Norton, 1992.
- Walls, Laura Dassow. *Henry David Thoreau: A Life*. U of Chicago P, 2017.
- Witherell, Elizabeth Hall. (1) "Thoreau as Poet." *The Cambridge Companion to Henry David Thoreau*. Edited by Joel Myerson. Cambridge UP, 1995, pp. 57-70
- . (2) "Thoreau's Watershed Season as Poet: The Hidden Fruits of the Summer and Fall of 1841." *Studies in the American Renaissance*. 1990, pp.49-106
- Wright, David. Editor. *English Romantic Verse*. Penguin Books, 1968.
- Yoshii, Chiyo. "Humanity as Matter: Nathaniel Hawthorne's Vivacious Materialism in 'The Birth-mark' and 'Rappaccini's Daughter.'" *Literary Imagination*, vol.22, issue 3, November 2020, pp.1-13.
- 岩田慶治 『アニミズム時代』法蔵館、2020.
- 高橋 勤 「ソローの耳」、福岡ロレンス協会編『緑と生命の文学』、松柏社、2001, 127-54.
- 山本洋平 「*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* における散文的詩と詩的散文」、日本ソロー学会編『ヘンリー・ソロー研究論集』第33号、2007, 11-20.